

さつている。

5. 食 材 料 費

ここでいう食材料費とは摂取した全食品量について購入、自家生産、貰物等の別を問わずすべて市場価格に換算し1人1日当りの平均を示したものである。

さて全国年平均1人1日当り食費は96.08円（うち動物性食品入手に要した費用24.32円）、市部106.12円（30.76円）、郡部85.66円（17.64円）となっており、市部は郡部より総額において23.9%、動物性食品については74.4%多く要している。

また市部、郡部を通じて食材料費は2月に多く要し8月に少ない傾向がある。業態別にみると事務的従事者世帯が最も多く105.48円を要しているが、労働的、田作、その他、田畑作、畑作、林業、漁業者世帯の順に少なくなり特殊農業世帯の62.07円が最低である。そのうち動物性食品入手に要した費用も事務的従事者世帯が高く31.36円、最低は畑作世帯10.29円で次いで林業従事者世帯11.40円、特殊農業世帯14.13円である。

Ⅳ 総 括

昭和31年度の国民栄養調査成績を概括すれば次のとおりである。

1. 栄養摂取量 熱量、蛋白質等量的には停滞しているが動物性蛋白質、脂肪、カルシウム及びビタミンA・B₂等若干の増加がみられる。しかしビタミンB₁は郡部では白米食増加のためかなり減量となつてゐる。基準値と比較すると熱量はほぼ十分であるが他の栄養素は依然として少なくいずれも相当量の不足が考えられる。

市部は郡部に比べ逐年改善の傾向をみせているが、郡部にあつては熱量は市部より多いが動物性蛋白質脂肪等がかなり少なく、含水炭素はむしろ多過ぎる等正すべき多くの欠陥をもつてゐる。業態別にみると熱量、蛋白質等量的には田作世帯が多いが、動物性蛋白質、脂肪、その他の栄養素を通じて質的にバランスのとれた業態は事務的従事者世帯である。特殊農業世帯は動物性蛋白質の摂取量も比較的多く、ビタミンA、C等最も多いが、脂肪の摂取が少なく、労働的従事者世帯及びその他の世帯は事務的世帯に準じ各栄養素は比較的平均に摂取されているが量的にかなりの不足にある。

林業従事者世帯及び畑作世帯は各栄養素を通じて最下位にあり、田畑作世帯も熱量および脂肪はやや多いが他の栄養素は全般に少なくこれに準じてゐる。

漁業者及び類似従事者世帯は動物性蛋白質の摂取量は他業態をはるかにしのいでゐるが、熱量及びビタミンA、C等をもつとも不足している。

2. 食品摂取量 全般的にみて質的構成において改善をみつつあり、動物性食品が増加し植物性食品は減少している。穀類としては米の消費は増加したが、麦類殊に大麦が激減し、油脂類、豆類はともに増加したが、魚介類は僅か減少し、肉類、卵類、乳類、特に乳類は激増している。野菜類及び乾燥野菜はかなり減少しているが果実、漬物は増加している。食糧構成の比較において市部は郡部よりはるかにまさつており、郡部は摂取食品の多くを限られた自家生産物に強く依存している関係から植物性食品が多く、その上白

米食の傾向が強まり食糧構成上多くの欠陥をもっている。

業態別にみると田作世帯は米の消費量が最も多く、田畑作世帯は乾麺、いも類、大豆、味噌、緑黄色野菜等の消費が比較的多い。事務的従事者世帯は動物性食品、油脂、砂糖、大豆製品、果実、嗜好品等業態中第一位にあり食糧構成は最もすぐれている。

労働的従事者世帯、その他の世帯は動物性食品が少ないほかは、比較的事務的従事者世帯に類似している。林業従事者世帯は動物性食品及び油脂類の摂取量が最低で畑作世帯もこれに準ずるが米は少なく、乾麺、いも類が多い。

特殊農業世帯は米の消費は最低であるが、大麦、甘藷、馬鈴薯、牛乳の消費は最も多く、漁業者及び類似従事者世帯は魚介類の摂取量は最高であるが、緑黄色野菜に欠ける等それぞれ特有な食形態をなしている。

3. 栄養欠陥 栄養欠陥の発現頻度はここ数年来顕著な増減をみなかつたが、昭和31年にいたりビタミンB₁欠乏に起因するとみられる疾患、即ちけい反射消失及びはい腸筋痛がかなりの増加を示した。また栄養欠陥を一つ以上持つ者の数は22.6%で前年と変化がない。なお郡部は各疾患を通じて市部より罹患率が高いが、これは郡部においてその大多数を占める農民の激しい農業労働と、これに伴はない不十分な栄養摂取が災しているためであろう。

4. 体位 体位は逐年回復をみせてきたが、昭和31年度には青少年の体位は、ほとんど戦前に日本人が記録した最高の体位の水準にまで回復したようであるが、男子の14才の身長及び体重は依然として基準値に達していない。なお青少年の体位並びに各年令を通じて身長、座高は市部がすぐれているが、16～18才以後における年令層の体重、胸囲、上腕囲は郡部が上位にある。

5. 血圧 最高血圧値は、男女差がやや認められ、女子の方が高い傾向を示しているが、最低血圧値は差が明らかでない。血圧分布の幅も女子が広い。業態別には、筋肉労働者が精神労働者よりもやや高い数値を示しているようである。季節的変動は余り明らかでない。

6. 脈はく 各年令階級別にみるといずれも女子の方がやや多い数字を示している。大体70台の数で一定している。職業別差、季節的変動等はいまだ明らかでない。